

コロナで足止め 一転チャンスに

港にモニュメントを作ったスリランカ出身の造形家
 デイルン・アーシリ・バンダーラさん

明日も働く

あすもはたらく

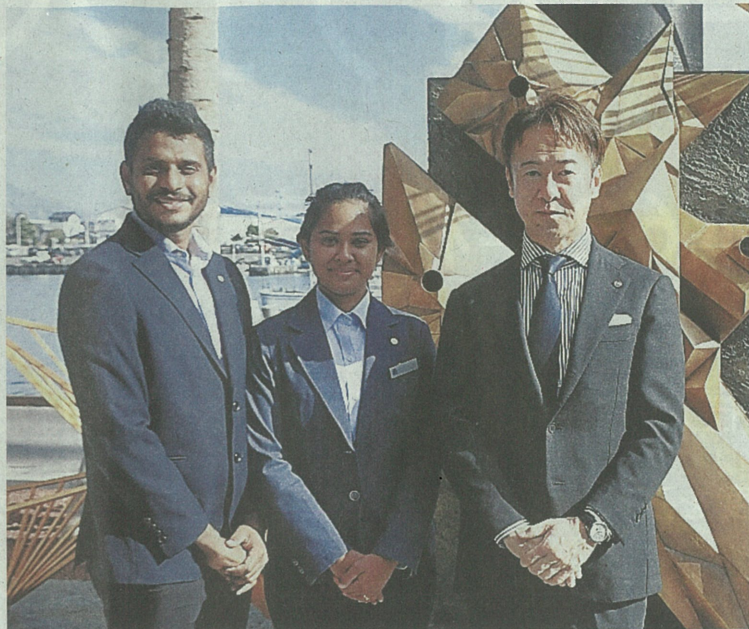
2

家だ。まさか日本で働くことになるとは。去年の今頃は、思いもしなかった。モニュメントは、温泉施設の玄関前に設置された。晴れた日には港の向こうに富士山が見える。人が集う街のシンボルになるように願いを込めて、「親しみやすい魚」と名付けられた。制作者はデイルン・アーシリ・バンダーラさん(29)。用宗港の近く、元は漁師の倉庫だった平屋の一角に即席でつくったアトリエで働



昨年2月、来日したのは妻の卒業式に出席するためだった。スリランカの大学で後輩だったキトゥ・ミニ・ジャヤティラカさん(27)と結婚したのは2019年。幼い頃に見たNHKの連続テレビ小説「おしん」でひたむきな日本人にアコがれた妻は、「いつか日本で仕事したい」と大学で言語学を専攻。さらに日本語を学ぶため、日本の語学学校に留学していた。

デイルンさんは大学を卒



造形家のデイルンさん(左)、妻のミニさん(中央)と小島社長



船の帆と魚をイメージしたモニュメント。港の奥には富士山が見える。いずれも静岡市駿河区用宗

妻に会いに来日中、才能認められ就職

業後、スリランカでフリーのインテリアデザイナーとして働いていた。仕事は順調だったが、結婚したばかりの妻と離れて暮らすのは耐えがたかった。自らが日本で働くことは難しかった。「日本で働くには就労ビザが必要。日本語も出来ない自分には仕事がない」。大切な人の夢を応援するため、泣く泣く異国へ送り出した。

その妻が昨年2月末、日本語学校を卒業した。そのまま日本で旅行会社に就職が決まっていた妻の卒業式に出席するため、1カ月の予定で来日。その滞在中に状況が一変した。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大でスリランカの空港が封鎖され、帰国できなくなった。予想もしなかった事態に「頭が真っ白になった」。

それから約3カ月、ミニさんと一緒にいられる幸せをかみしめた。ただ、仕事はまったくできなかった。母国では、仕事の依頼も届いていたが、対応できるはずもなく、幸せの中で先行きに不安を覚えていた。



チャンスは突然、訪れた。いつものように仕事終わりの妻を迎えに行き、海

辺で2人でアイスを食べていた時、声をかけられた。「あれ？ 旦那さんまだ日本にいるの」

ミニさんが勤める会社の親会社の小島孝仁社長(49)だった。帰国できない事情や不安を伝え、作品の写真を見せると、小島さんは言葉も失った。「デイルン、君の才能はすごいよ」

小島さんが経営する不動産会社は建築事務所も併設していた。職場見学に誘われ、やがて正式に依頼された。「ぜひうちで働いてくれないか?」。二つ返事で引き受けた。

日本に来て初めて本格的に取り組んだのが用宗のモニュメントだった。スリランカにいた頃から、インテリアデザイナーの仕事と並行して芸術家もめざしていた。

「すごいチャンスをもたらした」。帰国のことなど、先のことはわからない。でも、今は前を向いて進もうと思う。新しい年は日本語を勉強し、培ってきた技術で事務所を盛り上げ、芸術家としても飛躍したい。

働く上で大事にしてきたことがある。「チャレンジ」。どんな状況でも一歩ずつ歩み、挑戦を続けられれば、いつかチャンスが訪れる。そう信じているから。

(広瀬萌恵)